

緊急特集 コロナ禍の学校再開後、国立大学附属学校園の取り組み



月1回の土曜オンライン授業を、地域の教員研修事業として常設公開

地域に根ざす教員研修支援事業と新たなイベント開催

地域から感謝の声を届けた。今後は、地域振興の火種になると確信しています。

北海道教育大学附属釧路中学校

北海道教育大学附属釧路中学校では、6月からの学校再開以降、感染防止に向けた様々な工夫や改善策を...

長い休業期間が終了しなんとか学校を再開できましたが、感染症対策を伴う難しい学校運営が続いています。

秋田大学教育文化学部附属中学校

学校行事は、子どもたちの成長した姿や輝く個性などを保護者に確認していただく貴重な機会です。

コロナ禍における開かれた学校づくり

今年度は、毎年10月に実施している総合的な学習の時間の成果発表会を、三密を防ぐために校内の15会場をICT機器でつないで、オンライン上で行いました。

山梨大学附属幼稚園

新型コロナウイルス感染症予防と園の運営の両立に悩みつづ、試行錯誤し取り組んできた本園の試みを紹介します。

北海道教育大学附属釧路小学校

本校は総務委員会、事業委員会、安全委員会、広報委員会の4つの委員会組織のもとPTA活動を行っています。

PTA総務委員制作動画「緊急教命講習」

PTA安全委員会制作動画「元気で健康に過ごすための秘訣」

コロナ禍における新たな取り組み

ICTを活用したPTA活動

PTA総務委員制作動画「緊急教命講習」

PTA安全委員会制作動画「元気で健康に過ごすための秘訣」

PTA総務委員制作動画「緊急教命講習」

PTA安全委員会制作動画「元気で健康に過ごすための秘訣」

PTA総務委員制作動画「緊急教命講習」

PTA安全委員会制作動画「元気で健康に過ごすための秘訣」

鳥取大学附属小学校

本校の学校行事の新しい考え方

これまで学校の行事は基本的に全員参加を前提とし、安全確保を第一に実施されてきた。感染者数が全国最少レベルの鳥取でも、今春以後これまで通りには実施できず、いくつかの行事を中止・延期した。しかし、中止となった場合、子どもたちにとっては唯一の体験の機会を逃す可能性もあり、教育の質的低下も懸念される。そこで感染予防対策がほぼ確立した夏休み明け以後、本校では行事の実施を前提として、あらゆる感染予防の対策と環境を検討・対応して授業参観や運動会を実施した。その結果、各行事のこれまでの課題も改善され、保護者の事後アンケートでは高い評価を得た。他方で、県外への宿泊行事の実施については、事前に実施した説明会では各家庭の状況を背景に不安の声も寄せられた。



これらの経験から今回の感染症に対する保護者の考え方が実に多様であり、また高齢の家族との同居や子どもの既往症など各家庭で状況もさまざまであることが分かった。そこで本校では、これからの学校行事は必ずしも全員参加を前提とせず、必要な感染予防策を講じ、その条件で無理なく参加できる子ども・家庭に参加してもらおう方針を全家庭にお知らせした。給食でのアレルギー対応や、ケガ等により保護者の送迎を例外的に認めるのと同じ考え方である。このお知らせに対して、これまで保護者から異論は寄せられていない。

子ども用フェイスシールド開発への協力

鳥取大学の附属校園は、大学附属の特徴を活かし、学内のさまざまな人的・物的資源を相互に活用している。本校のキャリア教育と知財創造教育に協力して貰っている医学部教員からの依頼で、医療従事者用の使い捨てフェイスシールド「ORIGAMI」の子供用の試作品開発に協力した。その頃、本校でも英会話学習の際にマスク着用で口元が見えないことが課題であった。子どもたちは授業中に試作品を使用し、組み立て方、使い心地、耐久性などの課題をフィードバックし、商品化と授業の改善に貢献した。またその様子は地元テレビ、新聞でも紹介された。



名古屋大学教育学部附属中・高等学校

生徒を引率して海外で異文化を体験させる機会が、まったく途絶えてしまった。以前は、米国・リトアニア・モンゴル等で生徒たちは体験的に世界を学ぶことができた。「今年も残念だったね」で終わらせるわけにはいかない。そこでこれまでの取組を活かす形で「Active Learning in English (ALE)」を開催した。ALEとは、名古屋大学の留学生が、自国の社会的課題について高校生に伝え、高校生目標でその社会的課題解決に向けて議論をするプロジェクトである。もちろん使用言語は英語である。今回のALEには、13か国から17名の留学生が集まった。5日間10回(各回2時間)、ALEが行われた。本校だけでなく、地域の高校にも参加を呼びかけ、本校以外に4校が参加した。



コロナ禍において、海外の人たちとの交流が途絶え、生の英語に触れる機会がなくなり、多くの学校が困っている中で取組であったため、40名もの高校生がALEに参加した。参加した高校生は様々なアクセントの英語に触れながら、毎回異なる国の現状について学び、小

withコロナ期の学校行事の在り方

ニュー・ノーマルな学校教育へ向かって

グループで自分たちの考えをお互いに交わすことができた。生徒たちは、自宅に居ながらALEに参加できるメリットもあった。毎年多くの人が賑わう光緒祭も中止になった。高校生生徒会執行部を中心に「名大附属Online Week (MCWeek)」が企画立案された。感染対策に最大限の配慮をしながら、オンラインと対面を組合わせた多くの企画が授業後を中心に1週間にわたって行われた。オンライン企画では、MC eスポーツ、MCヨガ等、対面企画では、MCアート、MCテッド、MCヴォーカル、MCコレクション等が実施された。校内生徒のみの参加であったが、これまでの光緒祭とは、大きく異なったものとなった。中学生徒会も「映像作品発表会」に取り組んだ。エビを使って、クラス単位で科学実験や日常生活におけるさまざまな不思議についての作品等を10〜15分の動画にまとめた。各学年が、それぞれ大教室に分かれて作品を鑑賞し、優秀賞やアイデア賞などの賞も発表された。当たり前が当たり前でなくなった今、生徒たちの新しい発想と、生徒を信頼する教職員の一歩を踏み出す勇気が「ニュー・ノーマルな学校教育を創る」といつながった。



MCWeek

熊本大学教育学部附属中学校

本校では5月の体育大会を10月に延期して開催する事にしました。まずは、大会の目的を再確認し、①生徒が練習し達成感を感じる②集団としての団結力を高める③体育の授業との関連性を強める④新型コロナウイルス感染症への対応ができるという4点を目標としました。また、個人競技は中止し、学級対抗競技や団対抗競技を実施すると方針を決め、生徒会も含めアイデアを募りました。学級対抗競技は、例年の「ムカデ競争、台風の目(五人組で1列になり途中の旗を回る競技)」をなくし、「バレーボールを何回パスでつなげるか」という競技や「サッカーのパス回しをどれだけ速くできるか」といった競技を開発。団対抗の競技も、例年の「綱引き、長縄跳び、棒ひき(団ごと)に竹の棒を取り合う競技」をなくし、団ごとの音楽や太鼓を使った表現活動にしました。さらにこの競技の採点基準に「コロナ対策をしているか」という



バレーボールを使った新競技の様子

岐阜大学教育学部附属小中学校

本校は今年度より義務教育学校としてスタートしましたが、当初の予定変更を余儀なくされ、Web会議システム等ネットの活用により何とか乗り越えてきました。その中で平常時においてもプラスに働くと思われる取組を5つ紹介します。

- ①自分自身の生き方をみつめる重要な領域として「どう生きる科」を新設。平常時以上に、外部講師など様々な方々と交流の機会が増え、これからの生き方に対する学びを深めている。
- ②不登校傾向の子供たちにも恩恵をもたらしている。特定の教科について家庭と接続し授業に取り組み始め、徐々に教室に登校して授業を受けるまでになっており、学級委員の保障につながっている。
- ③本校は全国的にも珍しく各学年に特別支援学級を併設。その特別支援学級印刷部に学長と局長がオンラインで名刺作成と局長がオンラインで名刺作



③学長と局長がオンラインで名刺作成を発注する特別支援学級における授業の様子

新しい形の体育大会をめざして

観点を入れ、生徒にディスプレイをとる工夫とか、大声を出さないで表現する工夫をすることを目指しました。以上のような改善により、練習の時点から密にならず取り組むことができ、生徒は連帯感や達成感を感じることもできました。そして何より、新しい形の体育大会を作るんだという気概が生徒に湧き上がりました。また、生徒の頑張りにより、体育の授業で学習する技能の向上もできたようです。大会当日は、スペースを十分にとって生徒席を割り振り、その分、入退場門を廃止し各テントから直接各競技に参加させました。また、保護者を三年生の保護者に限定、一、二年生の保護者には、Zoomによるライブ配信を四つのカメラから行いました。また、手洗いをスムーズに行うため給水タンクを八ヶ所設置したり、県内の工業高校の生徒が作成した自動手指消毒器を5台借用したりしました。今後の総合の時間で、この装置の作り方を学習し、隣接する小学校や幼稚園に寄贈する予定です。



団対抗の表現活動の様子

Webシステム等のネット活用でプラスに転じる!

成を発注する特別授業を実施。発注の際は、子どもたちが緊張をしつつも、もらった人が一番印象に残る名刺を作ろうと、動機付けとして有意義な時間となった。

- ④義務教育学校となり1000人規模に拡大し、三密を回避したオンライン運動会を企画。1、9年生までの約20名の異学年集団を活動単位として競技にのぞみ、競技者以外はオンラインで教室から応援。保護者も家庭等から活動の様子を参観し高評価を得た。
- ⑤PTA活動にも有効。総会資料を学校HPに掲載し書面決議、Web会議システムを活用した役員会や教養講座を企画・実施するなど、ネットを大いに活用。年度末にはWeb会議システムを活用した総会を企画し実施予定。

コロナ禍に対応していくことは大変なものではありますが、これまでの教育活動等の見直しをする機会にもなったと思います。特にネットを有効活用することで、平常時にもプラスとなるものは今後も継続していきたいと考えています。



⑤PTA活動、実行委員会の様子。100人規模の会議をWebシステムで実施。

緊急特集 コロナ禍の学校再開後、国立大学附属学校園の取り組み 感染症対策を徹底した修学旅行の実践事例等

香川大学教育学部附属坂出中学校

4月に予定していた修学旅行を延期し、厚久島・南九州方面への修学旅行を10月15日から3泊4日の日程で実施しました。しかし、その道のりは決して簡単なものではありませんでした。

生徒の成長を考えると、修学旅行のような大きな学校行事は欠かすことができません。しかし、どの家庭でも、希望と不安の両方の気持ちをもっていきます。リスクをなくすることはできませんが、保護者の方々の協力や生徒の主体的に取り組む力を生かしながら、可能な限りの感染予防対策を実施してまいりました。

保護者の方々と協議は何度も行いました。全体では2回の説明会、学級代表の常任委員さんやPTA役員の方々の協議も重ねていき、様々なご意見をいただきました。生徒が中心となって積極的に感染予防対策を実践できるように、生徒を代表するプロジェクトメンバーとの話し合いも行いました。そして、次のような「感染予防対策」と「体調不良者が出たときの対応」を一緒に考えて作成し、取り組んでいくことにしました。特に、1日3回以上の検温は、生徒と教員が協力し合って短時間でできるようにしました。さらに、より詳細な対応をまとめた提案も作成し、保護者の方々にも配布して具体的な想定を共有してまいりました。



感染対策で仕切りを立てた食事会場



生徒の健康状態をタイムリーに情報共有

鳴門教育大学附属特別支援学校

本校では、中学部の修学旅行を9月16日(水)・17日(木)の2日間、徳島県内で実施しました。修学旅行では、日ごろは見られないような生徒の嬉しそうな表情や生徒同士のやり取りが見られ、実現できたことに感謝の思いでいっぱいです。

「修学旅行を楽しみにしている」生徒、「このコロナ禍と言われる年であっても生徒には、可能な範囲で感動的な体験をしてほしい」と願う教員や保護者、それぞれの願いの実現を目指し、多くの学校と同様に、本校でも計画を見直し、教育的意義と感染症対策という二つの命題に挑みました。



クルージングを体験

何より大事なことは、生徒の健康と安全を守ることです。日々報道される国内外の感染状況に怯える毎日の中、考えうるあらゆる対策を講じました。その主な内容が次の11点です。①旅行先は、移動のリスクを回避し徳島県内に変更。②移動は、公

コロナ禍であっても感動的な体験をしてほしい

公共交通機関を避けて、自校のスクールバス利用に変更。③宿泊先は、修学旅行1日1組限定とするホテルに変更。④食事を含む活動時には個室の借用を追加。⑤食事会場の座席配置は、会議室方式に変更。⑥食事形態は、ピュッフェスタイルから個別のお弁当に変更。⑦入浴は、大浴場から部屋風呂に変更。⑧宿泊する部屋は、寝具の間隔を空けるために和室に変更。⑨滞在型・体験型の内容に変更。⑩夏ならではのマリンスポーツの体験に変更。⑪地域の良さを再発見に着目。もちろん、検温を含む健康チェックや教室等の換気、消毒、手洗い、マスクの着用等3密を回避した感染症対策に日々励みました。学校の現状や取組は、こまめに配付文書や一斉メール、ホームページ等で発信し、保護者の理解や協力を得るよう努めました。こうした取り組みが児童生徒や保護者の安心につながり、願いの実現につながったと感じています。



浮き輪で間隔を空ける

保護者や生徒とともに乗り越える修学旅行

① 修学旅行における感染予防対策の概要
1. 式の簡略化
2. 乗り物や施設見学時の予防
3. こまめな健康チェックと検温
4. 宿泊施設(食事会場)における予防
5. 食事前には手消毒、食事は静かに食べる。また、食べ物を友達にあげたりする行為は禁止とする。
6. 食事会場は対面を避け、どうしても対面になる場合は、仕切りを立てる。
7. 宿泊施設では、部屋の行き来をしない。
8. 使用したマスクは、部屋ごとに入れて回収して、まとめて捨てる。
9. 買い物の時間を指定して、お土産売り場で密になるのを避ける。
10. 入浴で大浴場を使用する場合は時間差をつけ、人数を収容人数の半分以下とする。
11. 体調不良者が出たときの基本的な対応
1. 体調不良者の発見(①5人以上の発熱や味覚・嗅覚異常なし)保護者に連絡、しばらく別室などによろしくお過ごしを促し、必要場合は病院へ(診察後、結果を保護者に連絡)
2. 体調不良者の発見(②5人以上の発熱や味覚・嗅覚異常あり)保護者に連絡、PCR検査受診の可否を保護者と保護者に連絡
3. 保護者の許可があればPCR検査を受ける(医師の診断と必要に応じて保護者を保護者に連絡(その後の対応は、保護者の指示に従う))

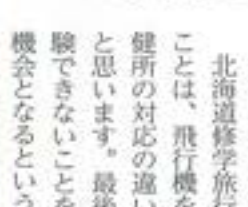
奈良女子大学附属中等教育学校



オンライン授業とは実際に取組んだ教員の意見聴取の結果から、全く別物と考えるべきだと提言しておきたいと思えます。対面の授業準備とオンラインの授業準備を同時に行うのは教員の負担が大きくなり

本校では、コロナ禍の授業を「学びのありかた」によって4期に分けて考えています。1期「一斉臨時休校と送達課題の実施」、2期「緊急事態宣言とオンライン学習の開始」、3期「1時間制にもとづくオンライン学習の実施」、4期「分散登校から全員登校へ」となります。3期は、5月のゴールデンウィーク明けから、「G-SUIT」を活用して、特別時間制にもとづくオンライン授業を行いました。その後、4期は、クラスの半数(20名)が登校し、半数は在宅での同時配信授業(G-Meet)を展開しました。このオンラインと対面の組合せによるハイブリッド授業は、3期の全員オンライン授業とは実際に取組んだ教員の意見聴取の結果から、全く別物と考えるべきだと提言しておきたいと思えます。対面の授業準備とオンラインの授業準備を同時に行うのは教員の負担が大きくなり

大阪教育大学附属池田中学校



9月1日から3日にかけて、例年より縮小した形で長崎方面への修学旅行を実施しました。コロナ禍に加えて台風9号接近の中、予定していたプログラムを変更しながらも、子どもたちは長崎の街を満喫していました。例年は駅コンコースで実施する出発式や解散式を新幹線内で行い、さらには帯同した医師によって、新型コロナウイルス感染症予防対策等に参加者全員に周知徹底しました。持ち物に関しても、感染予防の観点から、お茶の補給の必要のある水筒の持参を取りやめ、現地でペットボトルを配布する形式をとりました。また、宿舎での検温と手洗い、手指消毒の徹底、移動時の座席等の消毒の実施や、食事においても宿泊施設のご協力により、卓飲料を

北海道修学旅行を終えて、今後考えなければならぬことは、飛行機を使わない旅程の選定や、地域による保健所の対応の違いを考慮しておくことをあげておきたいと思えます。最後に、修学旅行は、日常を離れて普段体験できないことを体験するからこそ、自らを見つめ直す機会となるということを、生徒の成長から実感しました。

学校行事 with コロナ

今、学校は、授業の在り方や学校行事の企画運営等、新しい変革が求められています。このタイミングを捉えて、その時代に即した学校の在り方を見据えつつ、附属学校として地域のモデル校の役割を果たすべく、今後も力を尽くしてまいります。



すきるからです。今後、第3波、第4波のコロナ感染拡大期にあつては、本校ではハイブリッド授業ではなく、全員が対面授業かオンライン授業を選択する方向で考えています。

附属学校休業中の取り組みとこれからの改革

オンライン授業の研究支援事業

北海道教育大学附属釧路中学校

学校の目標として、教科の本質に迫る授業、生徒が知的好奇心を持って主体的に学ぶことを掲げられています。それを実現するために、すでに対面授業においても、情報端末を文房具のように用いる授業が日常化してまいりました。そのために、コロナ禍においても、オンライン授業を身構えることなく実践し、その良さを生かすことができていると実感しています。また、その経験を積極的に他校にも共有されており、地域の教員研修支援センターとしての附属学校の役割を果たされています。



緊急事態下で園の使命を果たすために

福井大学教育学部附属幼稚園

「子どもの姿を核に学び続ける」を核として、「保育の見える化」を重視した保育改革を推進されてきました。平成29年からfacebookの活用、平成30年からは園と保護者のコミュニケーションを支援するために、情報通信技術を活用したアプリを導入されました。保護者の幼児理解の推進、教職員の資質向上、地域への発信、家族間で子どもの姿の共有、連絡や情報把握の活用にも役立ちました。さらに、YouTube限定配信とZoomオンラインシス



テムの活用で、臨時休園中も園児たちが先生方のお顔を見ることができ、園児たちの心の健康を支えることができました。そこでは、領域ごとの柱で作成した園児向けの動画や新年度の園生活のイメージを配信、そして園長、園児、教員の自己紹介等も同様に配信されました。

新入園児のご家族からは臨時休園中も孤立せず、大学と幼稚園に親しみと所属意識を持つことができ、安心して過ごすことができたという好評の声をいただきました。

オンライン授業

千葉大学教育学部附属小学校

新しく赴任された先生と、新三年生の子どもたちが、初対面しコミュニケーションをはじめる大切な日が「学級開き」です。しかし、休校中では「学級開き」も「授業」も教室で行うことができません。オンラインで行われました。

オンラインで「朝の会」を毎日続けることで、先生と子どもたち、そして子どもたちとの間で、活発にコミュニケーションができるようになりました。

その中にある「子どもたちの意欲」を学びに繋げられるよう、先生は不思議に思ったら何でも投稿してみよう、子どもたちに呼びかけます。そして、その疑問をもっと深掘りしてい



新しく赴任された先生と、新三年生の子どもたちが、初対面しコミュニケーションをはじめる大切な日が「学級開き」です。しかし、休校中では「学級開き」も「授業」も教室で行うことができません。オンラインで行われました。

先生がオンライン形式で、子どもたちとコミュニケーションし、各人の学びを支えるように挑戦された姿は、有益な参考事例となります。

夢をかなえる支援者ミーティング

熊本大学教育学部附属特別支援学校

熊本大学教育学部附属特別支援学校からは、生徒の自立と社会参加を願い、学校・保護者・関係機関が一体となって実践する取組みについてご報告していただきました。

取組として、生徒の「夢・希望」の実現に向け、学校・家庭・関係機関が組織する「支援者ミーティング」を開催し、個別の教育支援計画を作成すること、きめ細やかな支援を実践されています。これを基に家庭で行った実践（全61事例）を収録した実践集を刊行され、そのうち「一日日記から自分を振り返る力」「ひとりで行けるモン！」「バスや電車を乗り継いでプーチ



人旅」は「こはん・おかずを作ってみよう」の3つの取組み事例をご紹介します。学校・保護者・関係機関の支援により、生徒の確かな成長が感じられる取組みでした。

全附P連PTA研修会全国大会ディスカッション

パネラー

- 齋藤 潔氏 (文部科学省 総合教育政策局 教育人材政策課 教員養成企画室長)
- 木村 勝彦氏 (全国国立大学附属学校連盟 理事長)
- 北川 和也氏 (公益社団法人日本PTA全国協議会 参与)
- 田中 一晃 (国立教員養成大学・学部・大学院、附属学校の改革に関する有識者会議 委員、全附連事務局長)
- 神余 智夫 (一般社団法人全国国立大学附属学校PTA連合会 会長)

コーディネーター

- 呉本 啓郎 (一般社団法人全国国立大学附属学校PTA連合会 直前会長)

学校休業中の事例報告を受けて、パネルディスカッションが開催され、様々な立場からの意見が語られました。

学校は、手探り状態の中ぎりぎりのところで成果を上げているという点や、保護者からは先生方のご尽力に敬意を表しながらももっとできることもあるという意見もありました。そうした議論の中で、現在のコロナ禍における附属学校園の先進性が語られ、あわせて全国の附属学校園への期待が共有されました。



全国大会を終えて

個人的に第2回よりPTA役員として、また第7回より運営スタッフとして関わらせていただいた全国大会も今年で11回目を迎え、10月3日に無事終えることができました。ご視聴頂いたPTA役員の皆様、並びに厳しいスケジュールの中、動画の撮影・提供をいただきました全国の附属学園の皆様、また来賓の皆様、誠にありがとうございました。今年の全国大会は、例年とは違った形とならざるを得ませんでしたが、今後の全国大会の在り方を考えるいい機会となったのではないかと思います。私のように地方都市在住の役員の方の中には、東京で全国大会の研修を受けるということにある意味楽しみ(?)を感じていた方もいらっしゃると思います。また、東京には行かれないけど研修は受けたい!という方もいらっしゃると思います。そんな皆様が全員受けられる研修大会を作れるように引き続きで参りたいと思います。全附P連の活動に今後ともご理解ご協力を宜しくお願い致します。

令和2年度 全附P連PTA研修会全国大会 副実行委員長 谷田 節秀男

作文・絵作文コンクール

全附P連では2年前から作文・絵作文コンクールを開催しています。これは、先生に対する感謝の気持ちや思い出を作文や絵作文で伝えようというものです。全国大会では昨年度のコンクールで会長賞を受賞した鹿児島大学教育学部附属中学校の石川 澄怡さんの作文「私の羅針盤」が朗読されました。先生の勧めで続けた日記のお陰で、自分と素直に向き合えるようになったと綴られており、忙しくても返事を書き続けてくれた先生への感謝の気持ちが溢れる作品でした。